

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 市川 彰

論 文 題 目

メソアメリカ古典期社会の形成過程に関する考古学的研究

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	梶原 義実
委員	名古屋大学	教授	山本 直人
委員	名古屋大学	教授	周藤 芳幸
委員	茨城大学	教授	青山 和夫

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文はメソアメリカ古典期社会の形成過程と特質について、墓制研究による社会階層化の過程とその背景の解明、発掘調査と出土資料の分析を通じたメソアメリカ周縁社会の特質に関する研究を切り口とし、考古学的に論究することを目的としている。

序章では、メソアメリカに関する基本的枠組みを概観した上で、研究史と現在残されている課題を明確にし、課題解決のための本研究の視点と方法について述べている。

第Ⅰ部「社会階層化からみたメソアメリカ古典期社会の形成過程」においては、社会階層化の過程とその背景の解明にあたり、墓制研究が有効な手法であるとし、「墓への労働投下量」という視点に着目した方法論・理論的枠組みのもと、資料解釈を行っている。第1章で分析視点と方法を明示し、第2章でマヤ地域、第3章はオアハカ地域、第4章はメキシコ中央高原と、メソアメリカ各地域の事例について分析を行い、その社会階層化と背景についてそれぞれ考究している。第5章ではその結果から、メソアメリカ古典期社会の形成過程と特質について、①紀元後200～300年頃に階層間格差の二極化の画期がみいだせること、②その現象には地域差や時期差が存在し、支配者層の戦略も異なること、③中間層や下位層の人々を含む重層的な階層秩序があつたこと、④先古典期はイデオロギー操作に偏向した支配者が、古典期は経済や軍事といった実態のある権力資源を有効に使い社会統合を達成したこと、⑤共同的性格を指向するテオティワカンと独占的性格を指向するマヤ地域の大センターが併存する古典期は、メソアメリカ文明史においても特殊な時期であったことを指摘している。

第Ⅱ部「周縁からみたメソアメリカ古典期社会の形成過程」では、主に筆者の現地考古学調査をもとに、地理的文化的周縁と位置づけられる社会における変化の実態と特質について論じている。第6章では現状と課題を明確にしたのち、エルサルバドル共和国チャルチュアパ遺跡を題材として扱うことを明示した。第7章では遺跡の変遷過程を、建造物、炭素14年代、土器のデータをもちいて再構成することで、考古学的議論を可能にする時間軸を設定するとともに、イロパンゴ火山の噴火による民族集団の交替をうながすような壊滅的影響は考えにくいとする主張を開いた。第8章では社会変化の画期として、先古典期後期には同列位相内の複数の異なる集団が存在する一方で、古典期には突出した階層上位者が出現したことを明らかにした。第9章では外来要素の受容について、考古学的手法と理化学的手法をもちいて論じ、古典期前期にチャルチュアパにみられる外来要素は、在地集団が能動的かつ選択的に受容したものであると主張した。第10章ではそれらを総合的に検討し、周辺の大センターが盛衰を繰り返すなかで、周縁であることを積極的に利用し、極度な肥大化や複雑化を指向せず社会活動を維持しようとした巧みな「周縁社会の戦略」の存在を主張した。

最後に終章では、上記2部10章の成果を総合し、メソアメリカ古典期社会の形成過程についてまとめている。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文で研究対象とされるメソアメリカ地域においては、研究の中心地であるアメリカ合衆国において考古学は歴史学ではなく、人類学の一部であることもあり、歴史叙述において人類学的な理論構築が主な目的となる傾向が強い。

論者はとくに本論第2部において、論者自身の現地での綿密かつ長期間にわたる考古学調査をもとに、建造物および土器などについて、詳細な編年研究をまずおこなっている。そしてその結果に立脚しつつ、先古典期から古典期への移行期における諸要素の変化の有無や、また外来要素との関係を分析し、そのうえで社会構造に関する議論を構築している。このような論者の研究姿勢は、メソアメリカ地域における今後の考古学研究のひとつのモデルケースとなり得るものであり、高く評価できる。

またおなじく本論第2部において、多くの研究者がいわゆる「中心」とされるような大規模な遺跡の調査研究に終始するなかで、その「周縁」に位置する集団や社会の主体性や独自性に着目したことはきわめて重要である。論者は、地理的文化的周縁と位置づけられるような社会でも、意志ある個人や集団が存在し、常に動的な存在として、社会活動の維持や強化のために独自の戦略を採用していたという「周縁社会の戦略」の存在を強調するが、周縁の視点から社会をみていく手法は斬新であり、評価に値する。

さらに論者の議論は周縁社会の分析にとどまらず、本論第1部においては、墓制という観点から広大なメソアメリカを概観し、各地域の地域的特質とそこから読み取れるメソアメリカ社会の階層化のあり方について言及している。特定の遺跡についてその構成要素を総合的に深く掘り下げるミクロな研究手法と、それをメソアメリカ全域の研究課題へとフィードバックしていくマクロな視点の双方からメソアメリカ社会を捉えていこうとする論者の姿勢は、非常に意欲的で高く評価できる。

しかしながらそれゆえに、とくに第1部において、墓への労働投下量という条件のみから社会構造に論及する点や、副葬品としての希少財をその種類数のみから分析する点など、単純すぎる議論なのではという懸案が残る。また対象地域が広域にわたつたこともあり、事実関係についてやや誤認があることや、引用文献に不備が散見する点、文章表現がやや未熟な点についても惜しまれる。

とはいえたこれらの点は、論者の研究への意欲と目的意識の高さがもたらしたものとも考えられ、今後の研究の中で乗り越えていくことが充分に可能であり、本論文の価値を損なうものとはいえない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（歴史学）の学位を与えるのにふさわしいものと判断した。